

現在、被災地で求められている ボランティア活動

震災から二度目の秋が終わろうとしています。震災直後、街を埋め尽くしていた瓦礫は今年の春にはあらかた片付き、まるで新興住宅地のような広大な空き地が出現しました。しかし、この広い空き地に未だ新しい建物は建てられることはなく、夏の間に背の高い雑草が生い茂り、今、枯れようとしています。建物が建設されない理由は、流された住宅地を内陸に移転するのか、それとも住宅地全体をかさ上げするのか、土地の利用計画が決まるまで新しい建物は建てられないからです。そのため、約5万3千戸の応急仮設住宅で暮らす被災者の生活は、将来を見通せないまま長期化の様相をみせつつあります。

被災三県の経済は莫大な復興関連予算の元、大きく動き出しています。**雇用**に関しても、有効求人倍率が被災三県全て1倍を超え、数字上は良好な状態です。しかし、その流れから取り残された被災者も少なくはありません。復興関連事業の雇用条件が「要：大型免許」など普通の被災者では満たせないものや、「中級労働・35才以下」など中高年や女性には厳しいものが多いからです。また復興関連事業に仕事を見つけられた人も、一時的な雇用でしかないことが、将来への不安となっています。

将来が見通せない中ではありますが、**被災者の生活**は、日常を取り戻しつつあります。被災者の生活が、非常時から日常へと向かう中、ボランティアに求められるものも、変化(多様化)しつつあります。たとえば炊き出しは、今でも最も歓迎されるボランティア活動です。しかし、震災直後のように食料不足に対応するというものではなく、適度のアルコールなどを交えながら、住民間の交流の場の提供という側面に重きを置きつつあります。

また、同じ仮設住宅の住民間に格差や価値観の違いが目立つようになり、トラブルの原因となっています。またトラブルを避けるための無関心、不干涉も広がりつつあります。住民と利害関係のない他府県のボランティアは、傾聴・居酒屋・お茶会・ライブなどの‘集いの場’を通して、住民のつなぎ役として期待されています。

「仮設より(食事の出る)避難所の方が良かった。」「自宅に帰ったが、もう一度仮設に戻りたい。」というさみしい声も聞かれます。そのため自治体からは被災者の自立を促すようなボランティア活動も要請されます。炊き出しの有料化や、仮設住宅から自宅に帰られた被災者へのボランティア活動などが被災者の自立を支援するものとして実践されています。

全国からの**ボランティア**が被災地にもたらすものは、炊き出しや衣服などの物資だけではありません。経済効率だけを考えたら、九州から東北に来るより、その交通費を提供した方が効率的なのかもしれません。しかし、岩手県の仮設住宅に九州の言葉が聞こえたとき、「そんな遠くから来てくれたのだ」という思いは、まだ自分たちは忘れられてはいないのだという強い心の支えとなっています。

最後に、「ボランティアに必要なものは」などと定義づけられるものはありません。しかし、謙虚な姿勢がその一つであることは間違いありません。被災者の就職、福祉、医療、これら現実の問題への対応は行政で行います。ボランティアが行える支援は、本当に限られたものです。その中で、無条件に示してくださる被災者の感謝の言葉に、私たちが答えられるのは「本当は、何もできていません」という謙虚さではないでしょうか。

1.被災地の今

臨海部の被災地の多くは、新たに建物が建築されることはなく、遠目には新興住宅予定地のようさえ見えます。再建が進まない理由は、災害危険区域に指定され住居の建設が制限されているためです。



二年目の秋も、
稲穂の代わりに雑草が茂る田園地帯



◀ 仮設商店街 …独立行政法人中小企業基盤整備機構らの助力で各地に仮設商店街が建設されています。

2. 炊き出し ～食料の配給から、おもてなしへ～

震災から1年半が経過した現在でも、炊き出しへの要望は強く、豚汁やカレーライスなどの配食が開始されると同時に長い行列ができます。もちろん、震災直後のように食料自体が不足しているという状況ではありません。そのためボランティアの側から、炊き出しにおもてなしやお楽しみ会的な要素を加える創意工夫もなされています。

九州からのボランティアは、モツやちゃんぽん。愛知県からは味噌料理。四国からはうどん。大阪からはたこ焼き。郷土色豊かな炊き出しは、今なお全国が被災地を見守っているという強いメッセージを被災された方々へと伝えています。

また、ボランティアによるテント居酒屋・テント喫茶などは被災者とボランティアをつなぐ傾聴の場にもなっています。



本格的なインドカレーの炊き出し



港が再開された漁師さんからの、お礼のほたて貝



大阪ならやっぱり



カキ氷

3. 復興後を先取りして～仮設住宅の中でのくつろぎ～

震災直後は、泥かき、瓦礫撤去、水や燃料を運んでの炊き出しなど、ボランティアの主役は若者でした。現在、被災者の生活の拠点が仮設住宅に移り、ボランティアの可能性が様々に広がりました。生け花教室や茶道、ミニライブや、炊き出しの合間に仮設住宅の集会場を使ったお話し会などです。これらの場面では、むしろ年長者ボランティアが主導されています。

生け花教室に参加された方が、「(震災前の生活に)戻ったら、生け花を習ってみたい」と仰いました。仮設住宅の方々の中には、かつての自宅が津波の危険区域に指定されるなど将来にわたり帰還の目途がついていない方が大勢います。また仕事を失ったままや、一時的な雇用先しか確保できないなど、収入に不安のある方も大勢います。将来が見通せない中だからこそ、本格的な茶器を使って抹茶を飲むなどの一時の安らぎが、復興後への希望が形となったものとなっています。

ボランティア活動の多様化と広がりが期待されます。



夏のあそび



お抹茶接待



お念珠作り



坊さんバンド「G・ぶんどりーか」



フラワーアレンジメント

4. 多様化するボランティアへの要望

ボランティアへの要望は、復興期に入り多様化しています。ボランティアと被災地を結ぶ社会福祉協議会やボランティアセンターの多くも、過渡期を意識した体制づくりを始められています。

「泥かきはなくなった」「瓦礫撤去は、重機が入りボランティアの手に負えない段階に入った」「だからもう、ボランティアのすることはなくなった」。このような話も事実ではありますが、多面性を欠いています。泥かきはなくなっても、仮設住宅からの自宅への引っ越しや、自宅周辺の清掃など、若いボランティアは貴重な存在です。

また、炊き出しなどの経験を積んだボランティアに対して、夏祭りや運動会へ出店の依頼もあります。

自立への強い意志も見られます。「ボランティア活動を手伝いたい」と申し出てくださる被災者の方がいます。ようやく港が再開された漁師さんが、獲れたてのホタテを持って炊き出しに参加されることもありました。『炊き出しの有償化』を打ち出される社会福祉協議会も、自立と平常化を志した姿勢と言えます。

また、これまで見落とされがちであった在宅の『見なし仮設』にお住まいの方々などへのケアも改めて見直され始めています。



4. 多様化する ボランティアへの要望



コーヒー1杯のボランティア
くつろぎながら傾聴



物資整理



夏の植物の苗をお届け



今も各地から
届けられる
支援物資